

石川・経験者にシェアハウス



シェアハウスで林昌則さん（左から2番目）一家と食卓を組み、一日の出来事を語り合うひきこもり経験者

この連載へのご意見や感想をお寄せください。記事で紹介させていただくことがあります。郵便番号400-8515、甲府市北口2の6の10、山梨日日新聞社編集局「扉の向こうへ」取材班(ファックス055・231・3161、電子メールkikaku@sannic-hi.co.jp)。

が、10年ほど前から「ひきこもり」が増えた。「昔は体当たりで良かった。ひきこもりは、どう対処していくか分からぬ」。悩みながら訪れた北海道で、人付き合いの苦手な若者が農業体験を通して地域に交わっていく姿に強い刺激を受けた。

シエアハウスには全国から問い合わせや視察が相次ぐ。それだけ多くの人が悩み苦しんでいる現実が見える。林さんは言う。「この取り組みが各地に広がれば、ひきこもりに苦しむ人たちの助けになら

ひきこもり」の経験を生かす訪問相談、ボランティア活動を通した相互サポート。一部は、支援の現場で中心的な役割を担う「民」の取り組みを報告する。

農作業で自信心も耕す

第5部 寄り添う「民」

午後7時。2階の自室から1人、また1人と降りてきて、いつもの席に着く。座卓には料理」。一番年下の川浪拓磨

さん(24)がおどける。「じゃあ明日から作つてよ。得意なメニューは?」と先輩から聞かれ、すかさず「白いご飯」と返すと、8畳間に笑い声が広がった。

の住人が共同生活を送る
「エアハウス」がある。現
20代と30代の男性3人だ
む。食事の準備、掃除、一
出しは当番制。夜は食卓
み、その日の出来事を語
う。雰囲気は、都市部で
の支持を集めている一般

「シ
あり、リスクのある人物とす
在は
られたのか。別の会社に勤め
が住
たものの、同じ目に遭うかと
ゴミ
しないと恐れ、自信を失
ていった。不安がつきまと
を囲
り合
今度は自ら辞め、ひきこも
る者
た。「自分はだめな人間だ」。
そう思い込み、自ら命を絶

さつそく、ひき」もりの若者を自宅に受け入れ、「百笑の郷」が取り組む農作業に促した。一家5人に次々と「家族」が加わっていき、いつしかシェアハウスの形に。6年前、事業の一環として空き家を軒を改修し、ひきこもり経験者専用のシェアハウスを開いた。

入居者は放棄地を耕し、米や野菜を育てるのが日課だ。地域のお年寄りの貰い物代行なども手掛け、社会復帰を目指す。「与えられた役割を果たし、他人と生活する時間が『自分にもできるんだ』という自信につながっていく」。

る。1人でも多くの若者が、
外に出られるきっかけをつく
り続けていきたい」

地域のお年寄りの買い物代行なども手掛け、社会復帰を目指す。「与えられた役割を果たし、他人と生活する時間が『自分にもできるんだ』という自信につながっていく」。林さんが意義を語る。

る。1人でも多くの若者が、外に出られるきっかけをつく
り続けていきたい」

指す。「手配された役割を果たし、他人と生活する時間が『自分にもできるんだ』という自信につながっていく」。林さんが意義を語る。

る。1人でも多くの若者が、外に出られるきっかけをつくり続けていきたい」

「自分はもとで見るんだ」という自信につながっていく。

外に出られるきっかけをつく
り続けていきたい」

これまで10人が就職や就学を果たし、巣立った。大久保さんも昨年3月から大工の仕事をしている。「ここを出てちゃんと働きたい。そして自分がのような境遇の人の支えになりたい」。前向きな言葉は、失った自信を少しずつ取り戻

ひきこもりの本人や家族を支えようと、全国でNPOなどの民間団体が活動の幅を広げている。行政にありがちな効果を数値で求める「成果追求」型ではなく、当事者に寄り添つて再起への道をともに探す「伴走」型の支援だ。空

「なりたい」。前向きな言葉は、失った自信を少しずつ取り戻している証しだ。

り添つて再起への道をともに
探す「伴走」型の支援だ。空
き家を活用した共同生活、「元
ひき」もあり」の経験を生かす

シェアハウスには全国から
問い合わせや観察が相次ぐ。
それだけ多くの人が悩み苦し
している証した

き家を活用した共同生活（元「ひきこもり」）の経験を生かす訪問相談、ボランティア活動を通した相互サポート。第

正解発ひきこもりを考える

扉の向こうへ

第5部 寄り添う「民」②

「ひきこもりで苦しんでいる人が、本来の姿に戻れる。そんな場所をみなさんつくりたい。そして全国に発信したい。支援をいただけませんか」

昨年9月、インターネット上で寄付を募るサイトに、こんな呼び掛けが掲載された。発信元は、ひきこもり経験者が共同生活を通して社会復帰を目指す「シェアハウス百笑」(石川県加賀市)。住人の桶橋崇文さん(31)が自らの経験を書き添え、活動への募金を求めた。

一般社団法人「百笑の郷」代表の林昌則さん(51)の元には、全国から入居希望が相次いでいた。3カ所目の開設を計画したが、資金問題が大きなネックとなつた。地元の協力者に頼るの

も限界がある。林さんが着目したのが、知人から紹介された「クラウドファンディング」と呼ばれる手法だ

日本でもノーベル医学生理学賞を受賞した山中伸弥氏の研究費集めや東日本大震災で被災した図書館の再建など、幅広い目的で活用さ

れた。

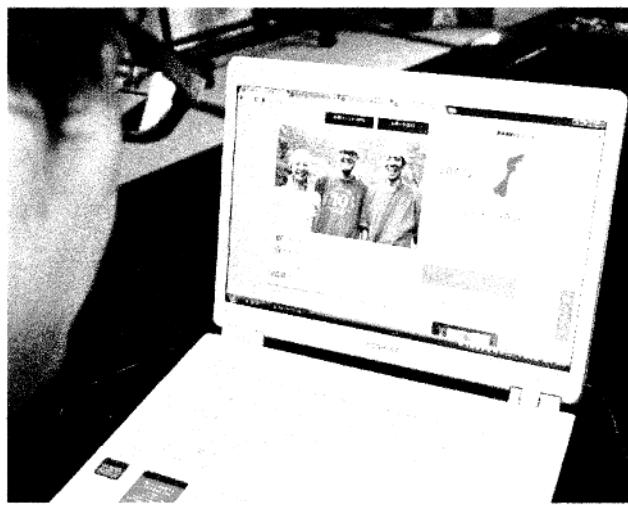
ネットで不特定多数から少額ずつ資金を集める仕組み。米国など海外で始まり、日本でもノーベル医学生理

れるようになった。「これなら全国から賛同者を募ることができる」。すぐに準備に取りかかった。

桶橋さんは石川県内の大学を卒業後、就職した会社で営業職に配属された。顧客とうまく話ができる、責任

についた。じた心が、ゆっくり解きほぐされていく。気付くと昔のよう感情を表に出し、自分と考えて動けるようにな

再起の歩み 共感広がる



インターネット上で展開したシェアハウス活動への支援の呼び掛けに、多くの賛同者と寄付金が集まった
=石川県加賀市

に、林さんたちは驚きの声を上げた。寄付の額に応じて、シェアハウスの住人が作った農作物やみそを贈りますと案内したが、集まって30万円くらいだろう。そんな予想を大きく上回る賛意が、100人を超す人から届いた。

「自分が自分を認められる場所って必要だと思います」「悩み苦しんでいる方やその家族の救いになることを願っています」。寄付と一緒に多くのメッセージが添えられていた。「みんな、

農作業体験でシェアハウスを訪れる子どもたちが変わった。作業の合間に遊び相手をせがんてくる。次々で月に入居した。気力がなく寝てばかりの桶橋さんを、寝てばかりの桶橋さんを、一緒に、多くのメッセージが見せてくれた。冷たく閉

「1,009,000」。呼び掛けを始めて2カ月。サイト上に示された募金額

で営業職に配属された。顧客とうまく話ができる、責任あるような職場の雰囲気に

つながってくれている」。3カ所目のシェアハウスの開設に向け、林さんは桶橋さんに「管理人にならないか」と持ち掛けた。社会復帰へのステップとして林さんが考えた役割だ。「自分が再起に向かうことができたように、シェアハウスの経験を一人でも多くの人に伝えたい」。桶橋さんは快諾し、資金集めにも中心となつて取り組んだ。

現在、林さんたちはひきこもり経験者が当事者の元を訪ねて話を聞く「ピアサポート活動」を計画している。寄付金の余剰分を活用しての取り組みだ。北陸の一地域で始まつた当事者を支援する取り組みがいま、全国の「共感者」のサポートを受けて発展しようとしている。

扉の向こうへ

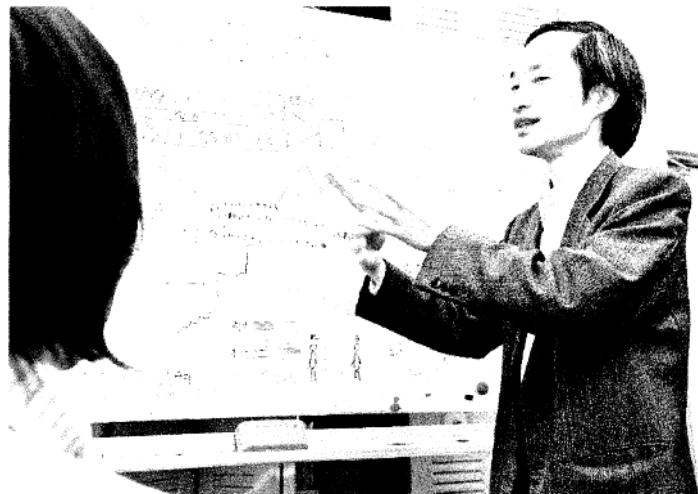
第5部 寄り添う「民」③

『『』これを見て。俺の気持ちがすべて書いてあるから』って、息子から渡されたんです』。ひきこもりと不登校の相談室「ヒューマン・スタジオ」を運営する丸山康彦さん(50)=神奈川県藤沢市=の元に、1人の母親から電話が入った。息子から手渡されたのは、丸山さんが13年前から発行しているメルマガ(メールマガジン)のコピーだった。

母親は夫婦で丸山さんの自宅に併設された相談室を訪ねてきた。「息子が何を考えているのか分からない」。途方に暮れる母親に、ホワイトボードを使いながら穏やかな口調で解説する。「出口の見えないトンネルを歩いているような、とても心細く絶望的な感覚ですよ」。ホワイトボードが文字と図でいっぱいになつたころ、丸山さんはこう

告げた。「私もそうでした。だから、本人の歩みに寄り添ってほしいんです」

代々医者、父親は官僚という家に生まれた丸山さんは、高校1年で学業でのつまずきから不登校になり、7年かけて卒業した。大学を出た後は期間採用で高校教師となつたが、1年で職を失い、34歳まで7年のひ



親の相談に応じる丸山康彦さん。ホワイトボードには、ひきこもっていた時の経験や心理状態が、びっしりと書き込まれている
=神奈川県藤沢市

当事者の心親に伝える

『『』より生活を経験した。両親との確執は深刻だつた。丸山さんが4日4晩、「上から目線」の支援や教育をなじり続けたり、逆に親から「まじめに生きていくこと」を誓約する文書を書かされたりしたこともあった。最後は「もう大人外に出たいという気持ちの01年にヒューマン・スタ

だから」と突き放された。ひきこもっている間中、「上から目線」の支援や教育に疑問を感じていた。本

高まりとともに、本人の歩なり、相談も増え続けた。部屋に閉じこもつて一言も発さない。親からの否定に気持ちは生まれる。ある親の丸山評だ。「ようやく本人の気持ちが分かったような気がします」と涙を流す母親もいる。

メルマガや相談室で発せられるメッセージは、さびついて動かなくなつた親子の関係を滑らかにする「潤滑油」の役割を果たしています。ひきこもりをめぐる多くの誤解を解きほぐすため、丸山さんはきょうも発信を続ける。

扉の向こうへ

第5部 寄り添う「民」④

1月初旬、「ピアサポートネットしぶや」＝東京都渋谷区のサポートセンター辻本敏也さん(40)は、ひきこもり状態の男性(23)宅を訪れていた。息子さんは、との問い合わせに、母親はインターネットの接続機器を見つめながら答えた。「たぶん、寝ていると思います」

機器のランプが点滅していれば、ネットを使っている証拠。今は消えている。

年末からほとんど顔を合わせていない子の様子をつかがい知る、数少ない手段だ。「このままじゃ、どうにもならない」。張り詰めた空

氣に、母親の口からため込んでいた言葉があふれ出る。辻本さんがひとしきり話に耳を傾けると、少し落ち着きを取り戻した。

ひきこもりの当事者どその家族が暮らす家の中に、「部外者」の目は届かない。

閉ざされた場所で誤解と疑心が重なり、月日を経ると家庭だけでの解決は難しくなっていく。その「最前線」に出向き、当事者たちの話を聴いて絡んだ糸をほどいていくのがピアサポートの役割だ。

「ピアサポートネットしぶや」のサポートターは約30人。ひきこもりの本人と年



勉強会で意見を交わす「ピアサポートネットしぶや」の相川良子理事長（左から2人目）と、ピアサポートーの若者たち＝東京都渋谷区

「対等な友達」信頼紡ぐ

齢が近い20～30代の学生らが当事者宅を訪問し、相談

や居場所づくりに関わって生の居場所をつくる組織がある」と話す。並行して、

いる。ゲームや音楽といった同世代ならではの「共通の話題」で距離を縮めていく。

前回。2009年にNPOの認証を受けた。相川さんは「ひきこもりの当事者は、医療に関する勉強会を毎月開催している。

理事長で、元中学教諭のな専門家に飽き飽きしている。

相川良子さん(78)らを中心

に設立された、地域の中高

達として関わる方が効果が

ある」と話す。

上岡さんは以前関わった

男性のサポート終了時、自

分の携帯電話の番号を書い

たメモを渡した。何かあつ

たらと声を掛けて別れた

が、一度も連絡はない。「今

は助けがなくても大丈夫

という無言の知らせだと受け止めている。

四六時中、一緒にいる友

達でなくない。携帯の連絡先に、困ったときにSOS

Sが言える存在がある。も

う一人にはならない。サポ

ーターと紡ぎ直した人と

の心境を辻本さんは「恐怖感」という言葉で表す。「で

ている。

も、きっと相手も同じこと

を思っている。もう、人に嫌われたくないって」。自分に自信を持つことができない

でいる、そう感じるという。

毎回、男性の好きなゲームの話で盛り上がる。先日、「一緒に秋葉原に行きたい」と初めて誘いがあった。電気街、映画、釣り、ラーメン屋。行き先は本人とサポートナーのやりとりの中で決めていく。押しつけや一方的な誘導は一切ない。

ひきこもりの当事者が一度失った人とのつながりを、サポートーとの関わりを通して取り戻す。家から外に踏み出すとき、信頼できる誰かが隣にいること

が大切にしているものを尊

重すること。趣味や好きな

ものを話してくれたとき、決して否定的な言葉は用い

ない。「あなたを拒否する

人ばかりじゃないって伝え

たいから」

上岡さんは以前関わった

男性のサポート終了時、自

分の携帯電話の番号を書い

たメモを渡した。何かあつ

たらと声を掛けて別れた

が、一度も連絡はない。「今

は助けがなくても大丈夫

という無言の知らせだと受け止めている。

も、きっと相手も同じこと

を思っている。もう、人に嫌

われたくないって」。自分に

自信を持つことができない

でいる、そう感じるという。

心掛けているのは、相手

の話を聴いて絡んだ糸を

ほどいていくのがピアサボ

ーターの役割だ。

「一緒に秋葉原に行きたい」と初めて誘いがあった。電

気街、映画、釣り、ラーメ

ン屋。行き先は本人とサ

ポートナーのやりとりの中で

決めていく。押しつけや一

方的な誘導は一切ない。

ひきこもりの当事者が一度失った人とのつながりを、サポートーとの関わりを通して取り戻す。家から外に踏み出すとき、信頼できる誰かが隣にいること

が大切にしているものを尊

重すること。趣味や好きな

ものを話してくれたとき、決して否定的な言葉は用い

ない。「あなたを拒否する

人ばかりじゃないって伝え

たいから」

上岡さんは以前関わった

男性のサポート終了時、自

分の携帯電話の番号を書い

たメモを渡した。何かあつ

たらと声を掛けて別れた

が、一度も連絡はない。「今

は助けがなくても大丈夫

という無言の知らせだと受け止めている。

も、きっと相手も同じこと

を思っている。もう、人に嫌

われたくないって」。自分に

自信を持つことができない

でいる、そう感じるという。

心掛けているのは、相手

の話を聴いて絡んだ糸を

ほどいていくのがピアサボ

ーターの役割だ。

「一緒に秋葉原に行きたい」と初めて誘いがあった。電

気街、映画、釣り、ラーメ

ン屋。行き先は本人とサ

ポートナーのやりとりの中で

決めていく。押しつけや一

方的な誘導は一切ない。

ひきこもりの当事者が一度失った人とのつながりを、サポートーとの関わりを通して取り戻す。家から外に踏み出すとき、信頼できる誰かが隣にいること

が大切にしているものを尊

重すること。趣味や好きな

ものを話してくれたとき、決して否定的な言葉は用い

ない。「あなたを拒否する

人ばかりじゃないって伝え

たいから」

上岡さんは以前関わった

男性のサポート終了時、自

分の携帯電話の番号を書い

たメモを渡した。何かあつ

たらと声を掛けて別れた

が、一度も連絡はない。「今

は助けがなくても大丈夫

という無言の知らせだと受け止めている。

も、きっと相手も同じこと

を思っている。もう、人に嫌

われたくないって」。自分に

自信を持つことができない

でいる、そう感じるという。

心掛けているのは、相手

の話を聴いて絡んだ糸を

ほどいていくのがピアサボ

ーターの役割だ。

「一緒に秋葉原に行きたい」と初めて誘いがあった。電

気街、映画、釣り、ラーメ

ン屋。行き先は本人とサ

ポートナーのやりとりの中で

決めていく。押しつけや一

方的な誘導は一切ない。

ひきこもりの当事者が一度失った人とのつながりを、サポートーとの関わりを通して取り戻す。家から外に踏み出すとき、信頼できる誰かが隣にいること

が大切にしているものを尊

重すること。趣味や好きな

ものを話してくれたとき、決して否定的な言葉は用い

ない。「あなたを拒否する

人ばかりじゃないって伝え

たいから」

上岡さんは以前関わった

男性のサポート終了時、自

分の携帯電話の番号を書い

たメモを渡した。何かあつ

たらと声を掛けて別れた

が、一度も連絡はない。「今

は助けがなくても大丈夫

という無言の知らせだと受け止めている。

も、きっと相手も同じこと

を思っている。もう、人に嫌

われたくないって」。自分に

自信を持つことができない

でいる、そう感じるという。

心掛けているのは、相手

の話を聴いて絡んだ糸を

ほどいていくのがピアサボ

ーターの役割だ。

「一緒に秋葉原に行きたい」と初めて誘いがあった。電

気街、映画、釣り、ラーメ

ン屋。行き先は本人とサ

ポートナーのやりとりの中で

決めていく。押しつけや一

方的な誘導は一切ない。

ひきこもりの当事者が一度失った人とのつながりを、サポートーとの関わりを通して取り戻す。家から外に踏み出すとき、信頼できる誰かが隣にいること

が大切にしているものを尊

重すること。趣味や好きな

ものを話してくれたとき、決して否定的な言葉は用い

ない。「あなたを拒否する

人ばかりじゃないって伝え

たいから」

上岡さんは以前関わった

男性のサポート終了時、自

分の携帯電話の番号を書い

たメモを渡した。何かあつ

たらと声を掛けて別れた

が、一度も連絡はない。「今

は助けがなくても大丈夫

という無言の知らせだと受け止めている。

も、きっと相手も同じこと

を思っている。もう、人に嫌

われたくないって」。自分に

自信を持つことができない

でいる、そう感じるという。

心掛けているのは、相手

の話を聴いて絡んだ糸を

ほどいていくのがピアサボ

ーターの役割だ。

「一緒に秋葉原に行きたい」と初めて誘いがあった。電

気街、映画、釣り、ラーメ

ン屋。行き先は本人とサ

ポートナーのやりとりの中で

決めていく。押しつけや一

方的な誘導は一切ない。

ひきこもりの当事者が一度失った人とのつながりを、サポートーとの関わりを通して取り戻す。家から外に踏み出すとき、信頼できる誰かが隣にいること

が大切にしているものを尊

重すること。趣味や好きな

ものを話してくれたとき、決して否定的な言葉は用い

ない。「あなたを拒否する

人ばかりじゃないって伝え

たいから」

上岡さんは以前関わった

男性のサポート終了時、自

分の携帯電話の番号を書い

たメモを渡した。何かあつ

たらと声を掛けて別れた

が、一度も連絡はない。「今

は助けがなくても大丈夫

という無言の知らせだと受け止めている。

も、きっと相手も同じこと

を思っている。もう、人に嫌

われたくないって」。自分に

自信を持つことができない

でいる、そう感じるという。

心掛けているのは、相手

の話を聴いて絡んだ糸を

ほどいていくのがピアサボ

ーターの役割だ。

「一緒に秋葉原に行きたい」と初めて誘いがあった。電

気街、映画、釣り、ラーメ

ン屋。行き先は本人とサ

ポートナーのやりとりの中で

決めていく。押しつけや一

方的な誘導は一切ない。

ひきこもりの当事者が一度失った人とのつながりを、サポートーとの関わりを通して取り戻す。家から外に踏み出すとき、信頼できる誰かが隣にいること

が大切にしているものを尊

重すること。趣味や好きな

ものを話してくれたとき、決して否定的な言葉は用い

ない。「あなたを拒否する

人ばかりじゃないって伝え

たいから」

上岡さんは以前関わった

男性のサポート終了時、自

分の携帯電話の番号を書い

たメモを渡した。何かあつ

たらと声を掛けて別れた

が、一度も連絡はない。「今

は助けがなくても大丈夫

という無言の知らせだと受け止めている。

も、きっと相手も同じこと

を思っている。もう、人に嫌

われたくないって」。自分に

自信を持つことができない

でいる、そう感じるという。

心掛けているのは、相手

の話を聴いて絡んだ糸を

ほどいていくのがピアサボ

ーターの役割だ。

「一緒に秋葉原に行きたい」と初めて誘いがあった。電

扉の向こうへ

第5部 寄り添う「民」

(5)



N
栗原市
岩手県
宮城県
仙台市
福島県
太平洋
山形県
秋田県
山形県
福島県
24歳で実家に戻った後、
お年寄りの手を取
り、千葉修さん(49)が歩
き、ゆっくり歩いて食卓に
案内する。夕食の膳をそつ
と差し出すと、入所者の一
人は笑顔を見せた。「あり
がとう」
宮城県栗原市の介護施設
「デイサービスまきば」。
牧師の武田和浩さん(51)
が、ひきこもりなびで行
場を失った子どもたちの居
場所をつくりろうと開いた
「まきばフリースクール」
の敷地内にある。スクール
の生徒たちの自立のきっかけ
になれば、2004年に開設した。
千葉さんが介護の仕事を
手伝い始めて7年がたつ。
お年寄りとの触れ合いを通
して、人と接することでも
随分慣れてきた。

宮城・奉仕通じ自己肯定



介護施設「デイサービスまきば」で、お年寄りの
介助をする千葉修さん。「人の役に立てる」と思
えるようになった
—宮城県栗原市

17年間、自宅にひきこも
っていた。高校を中退し、
兄の勧めで一人暮らしをし
ながらコンビニで働き始め
たが、仕事のベースに気力
が追いつかない。職を転々
とした後、24歳で実家に戻
った。居心地が良くて通
い始めた。半年が過ぎたころ
のこと。「介護を手伝って
みないか」と武田さんから
声を掛けられた。

また人嫌いが始まるので
は不安だったが、お年寄
りは自分の過去を尋ねたり
しない。補助のために手を
差し伸べれば、「ありがと
う」と返してくれる。今で
は食事やトイレの介助も板
につき、施設内でも頼られ
る。

スケールでは千葉さんの
ような「生徒たら」が定期
的に東日本大震災の被災地
に足を運び、被災者の話に
耳を傾けたり、仮設住宅の
補修を手掛けたりするボラ
ンティアを続けている。
武田さんの狙いはただの
被災地支援では終わらな
い。「生徒」の多くは、社
会や学校で傷つき、人との
関わりを恐れひきこもつ
た若者だ。そんな当事者た
ちが被災の地で暮らす人々
との触れ合いを通して、生
きることの意味、人とのな
れることが大切さを学んで
いく。

山梨発 ひきこもりを考える 35

つたときには「人や社会に
関わりたくない」と、一步
も外に出られなくなってしまった。
「死ねばいいんだ」。そう
考え続け、気付くと40歳を

過ぎていた。
外に出たきっかけは、居
間に置いてあった新聞だつ
た。「まきばフリースクー
ル」のことを取り上げてい
聞かず、誘ってくれたところ

た。場所は遠くない。記事
に背を押されるように電話
をかけた。「あしたから来て
みる?」相手は住所も年も
マやビツジの世話をしながら、
したいことをして過ご

なら行けると確信した。
年齢制限なし。通学でも
寄宿でもいい。農作業と少
しが人と関わることへの苦
手意識は消えていた。

スケールでは千葉さんの
ような「生徒たら」が定期
的に東日本大震災の被災地
に足を運び、被災者の話に
耳を傾けたり、仮設住宅の
補修を手掛けたりするボラ
ンティアを続けている。
武田さんの狙いはただの
被災地支援では終わらな
い。「生徒」の多くは、社
会や学校で傷つき、人との
関わりを恐れひきこもつ
た若者だ。そんな当事者た
ちが被災の地で暮らす人々
との触れ合いを通して、生
きることの意味、人とのな
れることが大切さを学んで
いく。

若者が社会に出るのをサ
ポートする自立援助ホー
ム、里子を育てるファミ
リー・ホームなど関連施設は増
え現在スタッフは35人に
なります。決まりを作らないのが
決まり、というような場所
だった。居心地が良くて通
い始めた。半年が過ぎたころ
のこと。「介護を手伝って
みないか」と武田さんから
声を掛けられた。

まだ人嫌いが始まるので
は不安だったが、お年寄

支えることで支えられ

る存在だ。「こんな自分で
も人の助けになっている」。
自己肯定感が芽生え、いつ
しか人と関わることへの苦
手意識は消えていた。

スケールでは千葉さんの
ような「生徒たら」が定期
的に東日本大震災の被災地
に足を運び、被災者の話に
耳を傾けたり、仮設住宅の
補修を手掛けたりするボラ
ンティアを続けている。
武田さんの狙いはただの
被災地支援では終わらな
い。「生徒」の多くは、社
会や学校で傷つき、人との
関わりを恐れひきこもつ
た若者だ。そんな当事者た
ちが被災の地で暮らす人々
との触れ合いを通して、生
きることの意味、人とのな
れることが大切さを学んで
いく。

若者が社会に出るのをサ
ポートする自立援助ホー
ム、里子を育てるファミ
リー・ホームなど関連施設は増
え現在スタッフは35人に
なります。決まりを作らないのが
決まり、というような場所
だった。居心地が良くて通
い始めた。半年が過ぎたころ
のこと。「介護を手伝って
みないか」と武田さんから
声を掛けられた。

まだ人嫌いが始まるので
は不安だったが、お年寄

りは自分の過去を尋ねたり
しない。補助のために手を
差し伸べれば、「ありがと
う」と返してくれる。今で
は食事やトイレの介助も板
につき、施設内でも頼られ
る。

そこにあるのは、デイサ
ービスでの介護と同様、一
方的な関係ではない。支え
て、支えられる。助けて
助けられる。「お互いさま」
の関係だ。

扉の向こうへ

第5部 寄り添う「民」
⑥

「私はチヤイをお願いし
ようかな」。昨年12月初旬、

(29)が、分量通りに計った牛乳を火にかけた。紅茶のティーバッグを入れ、煮立たせすぎないように慎重に鍋の中を混ぜる。イングで飲まれるスペイス入りのミルクティーは、この店のおすすめ商品だ。

名古屋・就職へ準備の場提供

母親がオレンジの会に相談したのをきっかけに、カフエで働くように。初めは洗い場に30分に入るだけだったが、いまではランチの盛りつけや区役所での弁当の販売もある。

苦痛だった他人との接触が、いまは楽しいと感じるという。昨秋、カフエで働く傍ら、介護施設でボランティアを始めた。ヘルパーの資格取得を目指し、勉強に励む。受け身の接客から、積極的に人に関わる仕事

苦痛だつた他人との接触が、いまは楽しいと感じる。昨秋、カブエで働く傍ら、介護施設でボランティアを始めた。ヘルパーの資格取得を目指し、勉強に励む。受け身の接客から、積極的に人に関わる仕事



注文を受けてチャイを作
る、ひきこもり経験のある
男性（左から2人目）。力
フェの仕事にやりがいを感じ
つつ、次の目標に向けて
準備を始めた＝名古屋市内

「自立とは人に認められ
て、自分でも自らの状況を
認められる」と。山田さんは
「居場所」や「つながり」だけではない、社会と
つながる「生産」の場が必要
要と説く。現在、カフェな
どで働く月給は数万円だ

カブエはひきこもりの当事者やその家族の支援を行うNPO法人「オレンジの会」(名古屋市)が運営する。注文を受けて飲み物を用意するのは、ひきこもりの経験がある元当事者たち。チャイを作る男性も、約2年間、人前に出られなかつた過去がある。

男性は大学を卒業後、病気をきっかけに就職した会社を1年半で辞め、その後ひきこもり状態になつた。

へ。「（）で自信をつけて、
次に行きたい」

無理せずマイペースで

事の山田孝介さんは「支援者が社会に出て行ける具は攻め」と話す。名古屋の体的な手段を持つところは、う。ような都市部では、「ひきこ少ない」(山田さん)。

事の山田孝介さんは「支援事者が社会に出て行ける具は攻め」と話す。名古屋の体的な手段を持つところはような都市部では、ひきこもりの本人や親を支援する少ない」(山田さん)。オレンジの会はカフェの団体が多い。ただ、活動のほか、自動車部品の内職やほとんどが語り合う機会やメール便の配達、パンや菓子づくりなどの「中間就労」に参加している女性(63)が、もつと増やせるよう仕組みを考えているという。う。

無理のない範囲で、就労に向けた一歩を踏み出す場を提供しているオレンジの会。毎年10人ほどが行き場を見つけ、会を巣立っていく。ゆつくりでいい。自分のペースで、できることから始めよう。会が用意した数々の「職場」には、そんなメッセージがあふれて

掲載日:2015年02月08日/1面/紙面貢001
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社

扇の向こうへ

第5部 寄り添う「民」

7

静岡・1対1で就労後押し

山梨発ひきこもりを考える

37



ひき、「もりかわの村田哲さん（右）を支援してきた福島久美子さん。」この先もずっと関わり続けていきます」

は福島さんをどう評する

うになり、資格を取得。西
社員で採用された。

さん。「サポーターが関わ
り、環境が変わることで能
力は発揮される」と語る。
サポーターは当事者とど

自の前に山積みされた書類を手に取り、指示された通りにそろえていく。2012年夏、村田哲さん(25)＝静岡県焼津市＝は通信制高校で事務を手伝つた。仕事を紹介したのは福島久美子さん(66)＝同市。NPO法人「青少年就労支援ネットワーク静岡」のサポートだ。

ひきこもり経験などがあり、働きたいけれど仕事ができない。同ネットワークは、そんな若者の就労を後押ししている。希望者に一人の担当サポーターがつく「個別支援」が特徴だ。

所を研修し、牛きかしいに至る」、「つながる」。静岡県立大教授の津富宏さん(55)が、少年院の教官を勤めた経験から「仕事を避けない若者は、関わっていく大人の存在が必要」と同ネットワークを設立、03年に活動を始めた。 サポーターは相談に乗りながら、その人に合った働き口を探す。個人的なつで、地元の理髪店など行きつけの店に受け入れを依頼することも。ひきこもり支援の専門家ではない素人のボランティアだが、同ネットワーク理事長を務める津富さんは「地域に持ついる人脉が大きな武器になつている」と説明する。

信が持てず、就職活動を始められなかつた。講義だけのセミナーに参加し、福昌さんを紹介された。就労体験

対話重ね適性見いだす

持つて、就職活動を始めた。親の勧めで同ネットワークのセミナーに参加し、福島ノンに付き合ってくれ、頼ねた中島さんは介護の仕事を通うこと決めた。「フランクに接する経験を重ねたい」と希望を持つようになる存在」。村田さんには就きたいと希望を持つよ

「しないのではない。人と
のつながりが少なく、孤立
しているのが実情」と津富

この連載へのご意見や感想をお寄せください。記事で紹介させていただくことがあります。郵便番号400-8515、甲府市北口2の6の10、山梨日日新聞社編集局「扉の向こうへ」取材班（ファックス055-231・3161、電子メールkikaku@santoniichi.co.jp）。

駆先に世話をされたか、すぐ
に就職にはなり着かなか
った。アルバイト生活が続
き、不満を福島さんに漏ら
したこと。「話を聞くこ
となら、いつでもできるか
ら」。元教師の福島さんは
「教える」という口癖を排
除し、悩む青年に「どうし
たの」と寄り添い続けた。
福島さんの支えを受け、
3年。村田さんは臨床工学
技士の資格取得を目指し、
4月から東京の専門学校に
経営する弁当店を紹介し
て、掃除をしたり、子どもの
遊び相手になったり。2箇
間の予定だった就労体験は、
ひと月に延びた。次は夫の

時間がかかるでも中島さんは自ら考えるように心を砕いた。突然介護の仕事を辞めたいと言い出した時も、会って話を聞いた。求められて介護施設側との話し合いにも付き添った。退職の思いとどまり、いまは恩顧の電話も来ないという。加瀬沢さんは「職場で話ができる人間関係ができたから」と喜ぶ。

同ネットワークが「個別支援」を始めて11年目。サ

て社会を生きていいくのを支える「伴走者」。これからも悩める若者の試行錯誤をサポートしていく。
(第5部終わり、次回は今月月下旬に掲載します)

うになり、資格を取得。田
社員で採用された。

さん。「サポーターが関わ
り、環境が変わることで能
力は発揮される」と語る。
サポーターは当事者とど